

# 〈ケア〉を考える会-岡山(第41回)

■日時：2019年1月6日(日) 16:00~

■会場：倉敷市真備町箭田 5188 (林道也 宅)  
駐車場：「メインセンター遠田」⇒ 林宅から北東へ約 100m、  
遠田池の堤防下(遠田池の北側)、小さな祠とムクノキの大木が目印



■内容

(1) 読書対話 16:00~

## 〈老い〉はほんとうに「問題」なのか？

鷺田 清一 著『老いの空白』(岩波現代文庫) を読みます。

今回は、はじめに から 30ページまで

▼幼くしてあることと老いてあること、つまりは人生というものの入口と出口、それをくぐり抜けるのが、とてもむずかしい時代になっている。とりわけ〈老い〉の現実はいま、どう考えても、きびしさ、惨めさ、なさけなさのほう、誇りや満ち足りしをのぐ。……〈老い〉のかたち、〈老い〉の文化が、〈老い〉そのものの内にも外にも見えない……。〈老い〉は空白のままである。……〈老い〉は、ものすごくラディカルな、つまり社会にとって根底的な問いとして、いま立ち現れている。(はじめに)

▼だれもがそれぞれにそれぞれの〈老い〉を迎える。(P.2)……〈老い〉は、ふつうのひとつもしくはふつうの家族にふつうに訪れることである。……〈老〉とは、〈幼〉とならび、じぶんの力だけではみずからを世話できない状態であるともいえる。〈老〉と〈幼〉は援助の必要なものである。……人間は介護されつつ誕生し、生育し、しばらくの間自立し——これもほんとうは分業というかたちで支えあいのなかにある——、そしてふたたび介護されつつ死にゆく。(P.5)

▼〈老い〉はいま「問題」として受け止められる。しかし、〈老い〉はなぜ……「問題」としてしか浮き立ってこないのか。〈老い〉は〈幼〉とともに、人生の一季節としてだれをも訪れるものであるのに。(P.10)

▼〈幼〉と〈老〉に共通するのは、いずれも単独で生きることができないということである。いいかえると、他のひとの世話を受けるというかたちでしかその存在を維持できないということである。が、その世話が、支えあいというよりも、一方から他方への介護であたり保護というかたちをとるしかないのは、哀しいことである。ひとはただ生きてあるだけでなく、生きるということ、じぶんがここにあるということ、そのことの意味をも確認しながらしか生きられないものであるのに、介護や保護やときに収容や管理の対象としてしかじぶんの存在を思い描くことができないときには、じぶんがここに生きてあるということについて意味を見いだすのがひじょうにむずかしくなるからである。(P.11)

▼支えあいというのは、けっして理想なのではなくて、ひとであるかぎり必然の事実なのである。(P.12)

▼ケアがもっとも一方通行的に見える「二十四時間要介護」の場面でさえ、ケアはほんとうは双方向的である。(P.12)



(2) 懇親会(新年会) 18:00~

食べながら飲みながら語り合います。

食べ物、飲み物は持ち寄りです。

会費：無料(懇親会で持ち寄りできない方は1000円程度のカンパをお願いします)

★どなたでも参加できます(初参加歓迎)。本を読んでいなくても(お持ちでなくても)参加可能。

★申し込み・問い合わせ⇒ 林まで：[michi-care@outlook.jp](mailto:michi-care@outlook.jp) 090-5366-1497

・・・申し込みが必要です。氏名、電話番号、メールアドレス明記の上、林までメール送信願います。  
(定員となり参加できない場合にのみ、返信いたします)

「〈ケア〉を考える会-岡山」ホームページ  
<http://okayama-care.jimdo.com/>

